

『ムーア人体発生学原著第 11 版』に関する訂正とお詫び

(第 2 版第 1 刷：2022 年 3 月 25 日発行 ISBN978-4-263-73201-4)

このたび、上記書籍をご購入下さいまして誠にありがとうございました。

本書は、翻訳をご担当された島根大学医学部解剖学講座の小川典子先生および松本暁洋先生のお名前を前付 xiv～xv 頁におきまして訳者として表示されないまま発行されました。両先生に深くお詫び申し上げますとともに本冊子に正しい紙面を掲載いたしますので、正しい内容につきましてはこちらをご参照くださいますようお願い申し上げます。

読者の皆様にはご不便をおかけいたしますこと、深くお詫び申し上げます。

2022 年 6 月 10 日
医歯薬出版株式会社

(書誌コード 732010)

監訳者まえがき

「ムーア人体発生学」は、第8版以来日本語訳が長く出版されていなかったが、ここに原著第11版の日本語訳を出版することになった。私事で恐縮だが監訳者は、大学生時代、本書を初版から翻訳された故星野一正京都大学教授から、同教授が本書の原著者である Moore 教授と同僚として働いておられたカナダ、マニトバ大学から京都大学に異動された最初の年となる1978年に解剖学講義・実習を学び、第6版から第8版までを監訳された故瀬口春道高知大学教授（当時京都大学助教授）から組織学を学んだ。また、その後発生学・先天異常学研究に携わり、はじめての国際学会として、1985年ロンドンで開催された国際解剖学会でヒト胚子の外形計測について発表した際、Moore 教授から励ましのお言葉をいただいた。正直に言えば、学生時代は別のよりコンパクトな原書教科書で発生学を勉強したのだが、本書の特に臨床面に関する情報量の多さには当時から大きな価値を感じていた。このようなご縁から、この度長く日本語に翻訳されなかった本書の翻訳のお話をいただいた際、大変な作業となるので逡巡したが、本書の日本語訳を出版することの意義の大きさを考え、また教員や学生さんたちが協力をしてくれるとの後押しもあり、お引き受けすることにした。

数ある発生学の教科書の中でも、初版以来不動の地位を築いている根拠となる本書の特徴は、原著のサブタイトルが示す通り、何といても“Clinically Oriented”という点である。

Moore 教授が産婦人科ご出身であることから、先天異常の臨床例の実写真、診断画像とそれに基づく記述が、類書の中で群を抜いて豊富である。あるいはこれが、わが国では基礎医学のはじめの段階で発生学を学ぶことの多い医学生には、必ずしもそこまで情報はいらないのでと考え、当時の監訳者のように他の類書を選ぶ傾向につながるのかもしれない。

しかし、本書には、人体発生学的世界的な教科書として現時点での確立した網羅的な記述と、最新の分子・細胞生物学的知見についての各項目に關与する遺伝子・タンパク質の記載、および別の章立てによる発生現象に関わる主な分子機構の解説に加えて、群を抜いて豊富な臨床的情報が含まれている。したがって、本書が人体発生学について基本を学べる信頼の置ける良書であるだけでなく、臨床医学を学ぶ過程で、さらに臨床の現場において、本書の意義・価値がより大きくなっていくことは明らかである。また、監訳者は学生時代、本書の図が、実物スケッチ的というよりは模式的であるものが多いことがやや気になった。しかし発生学研究を続けるうちに、身体や臓器の中で相対的に各部分の大きさや形、配置が激しく複雑に変化する発生過程において、実データに基づかず「実物のように」描くことは、逆にそれが正しいという誤解を与えかねない、であれば図は、本書のように「アイデア」「概念」を模式的に表す方がより正しい提示の仕方ではないか、と考えるようになった。

発生学の知見は日進月歩であり、その意味で補足すべきと考えた点や、わが国との違いについての解説などを、訳者註として加えた。

最後に、監訳者が島根大学解剖学講座発生生物学で教授として在任中、お忙しいなか翻訳を引き受けていただいた同教室の松本暁洋、小川典子両先生、下訳を引き受けてくれた島根大学医学部学生の、馬場将吾、岡部李奈、山口ダロン溪、岡耕平、梅木幸歩のみなさん、ならびに編集等で多大のご協力をいただいた医歯薬出版株式会社の関係各位に、心から感謝する。最終的な訳における不備は、当然ながらすべて監訳者の責任であり、読者のみなさまがお気づきの点があればご教示いただければ幸甚である。

2022年 出雲にて

監訳者
大谷 浩

Contents

- 第 1 章 ヒトの発生への序章, 1
第 2 章 ヒトの発生の第 1 週, 11
第 3 章 ヒトの発生の第 2 週, 37
第 4 章 ヒトの発生の第 3 週, 47
第 5 章 ヒトの発達の第 4~8 週, 63
第 6 章 胎児期: 第 9 週から出生まで, 83
第 7 章 胎盤と胎膜, 97
第 8 章 体腔, 腸間膜, 横隔膜, 127
第 9 章 咽頭器官, 顔面, 頸部, 139
第 10 章 呼吸器系, 177
第 11 章 消化器系, 189
第 12 章 泌尿生殖器系, 219
第 13 章 心臓循環器系, 259
第 14 章 骨格系, 311
第 15 章 筋系, 329
第 16 章 四肢の発生, 337
第 17 章 神経系, 353
第 18 章 眼と耳の発生, 393
第 19 章 外皮系, 413
第 20 章 先天異常, 431
第 21 章 発生期によく用いられる
 シグナル伝達経路, 463
付録 臨床に関連した問題の解答, 483
索引, 495
(和文索引, 欧文索引)

訳 者

監訳

大谷 浩 島根大学理事 (SDGs, 研究推進, 産学連携, グローバル化推進, 地域連携担当),
副学長 (研究推進・グローバル化担当)

訳

大谷 浩 島根大学理事, 副学長 (第 1 章~第 3 章, 第 14 章~第 21 章)

小川典子 島根大学医学部解剖学講座発生生物学 (第 4 章~第 12 章)

松本暁洋 島根大学医学部解剖学講座発生生物学 (第 13 章)